

研究ノート

新しい発想と独自の表現を生み出す言語教育の考察

谷 直 子

言語教育で最も重要なのは柔軟な思考だろう。新しいものに対する期待と不安を抑えながら新しい連想を心がけることが大切だと思う。母国語がある程度新しい言語習得を妨げるといった「負の転移」という理論のみが論議されている中で、うまく「正の転移」として活用していけたら良い。新しい活用方法を受け入れるためには言葉の連想や発想の展開が必要になる。また、個性的な独自の表現方法も合わせて重要な課題である。「負の転移」とはいうものの、有益な教育道具として肯定的に考えることによって連想と豊かな新しい発想を生み出す言語教育について考えてみたい。

母国語以外の言語で、社会文化的能力を身につけるのは、容易な事ではない。「負の転移」、言い換えれば不適切な直訳は、言語を学ぶ上で、障害にもなれば有益な教育的道具にもなる。「負の転移」の結果、非母国語話者に対する多くの誤解や否定的なイメージが生じる。意志の疎通は、良好な人間関係を維持するのに重要な局面であるから、コミュニケーションに支障をきたす間違いを避けられるという事は重要である。世界は接近し続けるのであるから、第二の言語における社会文化的能力の必要性が増す。

様々な言語にわたる社会文化的な能力の分析は、民族集団が持つ社会的に受け入れられてきた基準の民族のちがいによる非常に大きな可変性を調べる事を含む。多くの言語学者は、世界共通と考えられている発話行為を調べる事で、社会文化的能力を研究してきた。発話行為というものは世界共通であるが、言語学習者は、言語の一般的な慣習と共に誤った直訳をせずに発話行為の決まった形式を学ぶ必要がある。言語を教えてもらう事は可能だが、文化や慣習は経験しなければ身につか

ない。

言語の学習は、新しい文化への冒険、話の本質への研究の旅である。言語の習得は、シュヴェーダーの言う「文化心理学」のようなものである。言語を学ぶことは、言語そのものと文化における心理そして歴史的状況を学ぶ事を含む。

言語の学習は、一定の変化のないものでなく、努力、達成、障害、成長、失敗、休止からなる動きのある周期的なものであり、決して終わる事のない過程である。存在論的に言えば、文化的特性は、文脈や内容によって変わるものと、いかなる文脈や内容においても変わらないものがある。

子供が発話を通じて文化に出会うのと同様に、学習者は、規範（文法）、意味、蓄積した知識、そして目標言語の社会の生活や思考の様式を通じて、発話の内容を理解する。コルサロ（1992）によれば、人は文化を持って生まれるのではなく、幼い子供時代に社会化し、自分が属する仲間の文化を形成するのである。デュイツは、言語学習におけるオランダと日本の比較研究を行ったが、それによれば、具体的な例を与え、自分で発見する事を要求する指導は、オランダでは効果的だった。問題の分野の選択は、文化の違いから起きる障害を踏まえて、より詳しく学習させる具体的な例を通じて、規則は習得されるべきだと強調した。日本の英語教育機関で自由な会話形式の学習が効果的でないのは、これらの方法が、話す練習を十分に与えるとはいえず、日本人特有の障害にはほとんど目を向けていない、言い換えれば、英語と日本語の文化的相違を考慮していないからである。デュイツが、「自分で発見する事」の必要性を主張するのと同様に、「自己を投資する事」の重要性を、私は強調したい。学習者は、習得する為の

意識的な努力を注ぎ、達成したいと思うはっきりとした目標を持つことが必要である。言語教育において、文脈は、文化的価値、信念、物事を行う方法、歴史等を含めて、体系的に教えられなければならない。言語教育において心得ておくべき最も重要な要素は、「負の転移」を引き起こす第一言語（母語）による干渉を最小限にし、英語とその文化に関する状況をより多く与える事である。

言語と文化は、分離できないものである。臨床心理学者の土居健郎は彼の初めてのアメリカ旅行の事をその著書で書いている。アメリカ人にアイスクリームを勧められた時、自分の意志に反して、日本文化の礼儀に従ってまずはていねいに断ったのだが、そのアメリカ人は、文字通りに受け取り、それ以上勧めなかったという。この事からもわかるように、文化は、いつもある言語から他の言語に移す事ができるとは限らない。教室で文化的特徴の理解を啓発する試みとして、日本人の英語学習者が苦心する「負の転移」を観察するために、簡単な単語の連想を行わせた。一つの目的は、日本語の表現を英語に翻訳する時の共通の障害を明らかにする事で、もう一つの目的は、語から語への訳で引き起こされる問題の難しさの程度を調査し、学習者が二つの言語において違った考え方をしている兆候を見せるかどうかを調べる事である。日本語、英語共にとりあげたのは、family（家族）、love（愛）、friends（友達）、fear（不安）、responsibility（責任）、university life（大学生活）、success（成功）、freedom（自由）、happiness（幸福）、me（私）以上の語である。これらの語は、Lost In Translation: A Life In A New Language という本からとったものである。カナダへのポーランド人の移民である著者にとって、これらの語は、ポーランド語と英語では大きく意味が違う。例えば、英語で「この人と結婚しますか」と尋ねられたら、「はい」と答え、ポーランド語なら「いいえ」と答えるだろうと言う。同様に、アメリカに住むある日本人女性は、「自分の意志が家族の意志と相容れなかったらどうするか」という質問に対し、日本語では、「とても悩むだろう」と答えたが、英語では「自分のしたい事をするだろう」と答えた。「本当の友達とは？」と聞かれれば、「お互いに頼れる人」と日本語では答

え、英語では「率直な人」と答えた。二つの文化の中に暮らす事は、明らかに個人の表現に影響を及ぼす。（澤登、1990）

日本人の「負の転移」の主な特徴の一つは、描写の発話をするのに様々な形容詞や名詞の後にfulを付ける事である。例えば、「真心一杯」を表すのに heartfelt や warmful という語が作られた。hearty, heartily, heartfelt といった適切な表現は、直訳からは得られにくい。言語文化の研究は、それぞれの語の定義と使用の両方の範囲を考察する事を必要とする。翻訳が行われた場合、訳語が元の語の特徴や意味を十分に伝えていなかったり、含みが多かったり元の語より粗野だったりする場合がある。例えば、「おもしろい」という語は、funny, interesting, enjoyable, fun などと訳される。success を描写する言葉、perspiration の使い方であるが、英語では身体的な努力に対する身体的な反応を指すだけなのに対し、日本語の表現「努力の成果」は努力、忍耐、骨折り、苦難等を含む。語の持つ意味の幅は、言語によって違っているのである。

第二言語で考える傾向を示した学習者もいた。彼は happiness と聞いて target を連想した。彼は target という語で goal という意味を示唆したらしい。Goal という語の本質を把握して、似た語を選んでいたのであろう。”Love is blindness” は明らかに”Love is blind” を指している。また、fear から連想して frustful という語を作り出した例もある。これらは間違っただけで、子供と同じように語を作り出すという事は、英語で考えようとしているという事であろう。

諸文化比較の見方からすると、文化特有の連想が、responsibility, university life, self といった範疇に見られる。大学生活といった場合、日本人は大学時代の「遊び」という属性に言及する傾向がある。文脈と意味は、地位、行動、状況、経験、文化等影響を与える要素によって、決定される。ホールは、多くを文脈に依存する文化とそうでない文化との様々な違いについて、述べている。日本人のように多くを文脈に依存する人々は、話し相手に対しははっきりと表現しなくても、自分の気持ちを理解したり感じ取ったりしてくれる事を期待する。そういった社会では、間接的なコミュニ

ケーションが多く見られる。多くを文脈に依存しない文化では、責任は分散されるが、反対の文化では、権力のある人間が下位の者に対し責任を持つ。これは、多くを文脈に依存する文化において、若者が相対的に責任感や動機を持つことに欠ける理由のひとつであろう。人間は、使う文脈によって語に意味を与えている。通常使う意味以上の事を意味して語を用いたり、意味を限定しすぎた語を用いて十分に考えを表現していなかったりしていないか、注意する必要がある。我々は、経験を通じて文脈の意味を吸収し、語にそれを与える。文化は、様々なレベルの複雑さの中に見られる。最も基本的なレベルは、あいさつ、人と近づきになる事、自己の表現、適切な敬意の表し方を含む。最も深層にあるレベルは、ユーモア、冗談、皮肉、そして非言語的コミュニケーションを理解する事を含んでいる。学習者が、よくある文化的な問題点に気付くのを手助けする事は、彼らが意志の疎通をし、他の文化の人々をより理解するのを手助けする事になるであろう。誤解を招いたり恥をかいったり尊敬を失ったりする事に頻繁につながる点については、最も教える価値がある。社会文化的な能力は、学習者としても教育者としても、努力して習得すべきものである。言語学習は、時折他の文化を受け入れる為に自分の文化を手放す、という過程を含む。この過程は、諸文化を比較し分類する能力を高める助けになるので、より複雑な考えや感情を表現できるようになる為に不可欠である。言語教育は、様々な人に話かけられるようになる為に都合の良い機会となる事から、人間を高め、他の人々との意志の疎通を可能にする過程へと変わるべきである。会話は、自分の意見を述べる事に重点をおいて教えられる事がよくあるが、コミュニケーションは、両者が互いの意見を相手に伝え、十分理解しあう事で達成される。

文化特有の物の見方と、諸文化比較の物の見方の両方が、第二の言語を習得する上で必要である(ペデルセン、1991)。こういった見方ができないと、他の言語にアプローチする時に、目立つ違いを過度に強調し、重要な微細な区別を見過ごしてしまう。多文化的見解は、言語理解に対抗するより、むしろそれを補うべきである。一元的な見方や、力の強い多数派の文化に支配された普遍的な

見方でなく、意志的である事が、文化的に違った場面で、各人の適切な反応を可能にする。人は、いかにして文脈に多くを依存する文化から、そうでない文化に移行するのであろうか。明らかに、母国語から第二の言語への直訳には、問題がある。異質な物を、同じように価値があると受け入れる事に対する抵抗により、自分の文化に閉じこもるという現象が起こる(ペデルセン、1991)。それゆえ、言語習得は、変化、柔軟性、他文化の容認を必要とする人間の成長の過程である。その結果、人間を理解し、自分を表現する能力を伸ばす。文脈に依存する度合の違う文化への移行は、困難な事である。ニュアンスをはっきりと表現するのに慣れた人には、少ない言葉で広範囲の感情を表現する言語は難しく、逆の人にとっては、具体的な言葉で自分の事を表現するのは難しい。言語習得は、新しい文化での表現において、自分の本質を発見しようとする努力である。文脈への依存の度合の高い文化と低い文化の間に生きるバイリンガルのある女性は、依存度の高い文化においては、決まった方法で行動するように外部から期待される事に束縛され、含みのある表現における他人の意図を誤解する事もあった。二つの文化の間を行き来して、彼女は二つを混合した物を作り出したが、完全にどちらかの文化に属する事は困難であるとわかった。言語の経験を積むことで、様々な文化のわかりにくい部分が明らかになり、表現における柔軟性が増す。言語は、必ずしも文化を分けるものではなく、共通性の中での独自性をより理解する手段と考えられる。

負の転移は、言語習得にとって障害のように見えるが、その原因と解釈を研究する事は非常に興味深い。話し手と聞き手がうまく意志の疎通を行えない場合、「負の転移」は、否定的なものになる。言語の学習において挑戦と挫折を経験した人の多くは、動作を用いたり、母国語の言い回しや諺の翻訳を通して、意志の疎通を行っている。時には、母国の事象や語を、直訳し、聞き手の言語で同じ意味の表現があるかを尋ねることによって、説明する必要もある。このような「負の転移」は、その場での言語の比較研究の機会となる。ある文化や言語における経験が堅固なものであればある程、その習慣を打破し、他の言語を自然に理

解し意志の疎通をする能力を伸ばす事は困難になる。

コミュニケーションは、相手と交渉したり、相手を支持したり争ったりする過程である。社会的相互作用の対人関係の重要性は文化によって異なる。面目を保とうとするのは世界共通である。ホルトグレーブスとヤン（1992）は、権力、距離、相互作用、その他の何にウェイトを置くかによって、丁寧さの違いが生じて来ると示唆する。韓国人とアメリカ人についてのこの研究で、韓国人は、アメリカ人と比較して、権力と距離をより重要と考えた。これは、アメリカの個人主義的な文化と韓国の集団主義的な文化の間に貫して見られることである。韓国では、集団の内か外かのはっきりした区別によって、社会的相互作用におけるより大きな可変性が必要となる。様々な文化にわたるコミュニケーションは、丁寧さを決定する種々の要因を考慮して、相手の意図を適切に解釈する、難しい過程である。面目を脅かすものやその度合には、文化による違いがある為、誤解を避けるのは一層困難になる。言語の使用における、比較文化的な違いの本質に到達する事は困難であるが、誤解が生じる過程を認識する事は重要である。

英語話者と日本語話者とのあいだの、面目を脅かすものの程度の違いによる、比較文化的誤解の辛辣な例を、バーンランドは提供している（1975）。日本人の不本意さをアメリカ人は、距離という次元からよそよそしさだと受け取る。日本人は押しつけがましくなるのを避けようとしているのだ。言葉で表現しないために、誤って伝わる危険性がある。面目を脅かすもの、対人間で変動する事柄、そして文化的価値の違いを考慮に入れる事で、聞き手に対して適切な意志疎通の方法を身につけ、話し手の意図をより性格に理解する事が可能になる。上記の例にもこの事の必要性が見られる。言語と文化の間の可変性の程度を分析する事は、教室での「負の転移」を減少させるのに効果的である。「負の転移」の原因を明らかにして、より適切な表現と結びつける事が、重要である。過ちを訂正する時にその原因を理解していることで、教師は、学習者のとまどいや抑圧を減らし、affective filterの増大を妨げる事ができる

（クラッシュェン、1982）。それが言語教育の目標である。その際、個々の間違いを指摘するより、集団としての困難な点を分析する必要がある。学習者の能力をわずかに上回る題材を用意し、「負の転移」を教育的手段として利用する事は、目標の達成に有効な方法となり得る。母国語から他の文化への「負の転移」を減少させるには、目標言語の文化の社会的また心理学的規範を考慮する事がきわめて重大である。話者が面目を保持しようとする事は世界共通の現象であり、話者の意志疎通の方法、聞き手の理解、個性の投影、印象の形成、誤解の発生の理由が明らかになる。学習者が、それぞれの個性を失わずに効果的に意志の疎通を行う事で、自分自身を表現するより良い方法を発見させる教育が新しい研究課題である。

自分の本質を見極め、自分の文化と人格を發展させる事は、新しい言語を習得する為の挑戦的であるが、不可欠な目標である。教育者と学習者は、自己の間隔を持ち続けながら目標言語を形成する文化に同化する為、確立された快適な段階を越えて、新しい範囲を踏査する為の努力をいとわずに行う事が必要である。それは、自国の文化への拘束から脱し、新しい文化の可能性の下で、自分自身を効果的に表現する能力の真価を玩味する為、思い切って前進する過程である。

今後の研究課題

第一言語（その人の最も身に付いた言葉）が何であるかによって表現上の違いがあると考えられる。

それは、文化の違いが言語に与える影響が大きいからだといえるであろう。英語的思考とは「英語で感じる」ことから始まり、英語表現の中にこめられた英語国民の心を肌で感じ取れるようになることに至るとすれば、日本語的思考とは、それと同じように、「日本語で感じる」ことから始まり、日本語表現の中にこめられた日本語国民の心を肌で感じ取れるようになることだといえよう。言語習得においてこの「心理的要素」の壁を越えて思考の幅を伸ばすことが可能であれば、外国語の文化にあった表現で対応できるのだろうが、この心理的要素を受け入れることが一番難問

である。言葉のセンスともいえるこの心理的要素は異文化の意識や価値観を急に取り入れようとしても、そう簡単には行かないように、大変難しい問題である。

日本語的思考で「甘え」や「遠慮」といった感覚を外国人に理解してもらおうとしても、あまりにも違った文化的背景で育った人にとっては到底理解しえないものである。臨床心理学者の土居健郎が「甘えの構造」という本で大変苦労して「甘え」を英語に置き換えて説明しているように、また、「遠慮」も非常に難しい。どの程度となると余計に難しい。また、はっきり言葉で表現する文化とそうでない文化では話の趣旨が取り違えられる恐れもある。

「郷に入れば郷に従え」ということわざがある。基本的には行く先の文化や習慣について理解していくことが望ましい。しかし受入れ側として少しでも自分の文化的規範に沿うように振る舞っている相手に対して完璧を要求することは望ましくないように思える。日本で勤務しているあるアメリカ人が日本語を学んで、日本語でコミュニケーションをするよう努力しているにもかかわらず、彼のまわりには「外国人には到底分るはずがない」とか、「日本には日本人のやり方がある」とか、「彼は、日本語が不自由である」といった発言をする人がいる。具体的な説明を求めてもそれ以上は言わない。これ以上は言わないといった歩み寄りの交渉を許さないコミュニケーションこそ今日問題である。

曖昧な表現を大切に日本語の中でも、相手を尊重しない、また、真っ向から否定する表現は避けられないものか。またどのような心理的要因が作用しているのだろうか。相手が手ごわいので、逃げるしかない、真っ正面からの話合いはまずい、といったような相手を拒む原因が密にあるのではないか。出来るだけ相手の心にダメージを大きく与え、自分はこのような決定的な発言により、相手から身を守ろうといった防衛規制が働いているのかもしれない。しかし結果的にはコミュニケーションは絶たれる。

海外生活が長かった A 氏は日本語的思考感覚に欠ける所があるかもしれない。新入社員として、「早めに出社するように」と言われ、30分前に

出社して叱責された。良識のある日本人には分かることなのかもしれない。東京オフィスでは9:30始業である。しかし「早め」とは9:00ではなく7:30なのである。このような要求に対して、「具体的には何時ですか」と訪ねるのは日本の倫理的行動規範に反することになる。要点を速回しに言われても理解できない。だからといって A 氏が完全に英語的思考で自己表現をしているかと言えばそうではない。誰でも、独自のパーソナルスペースを持つ。それは互いに犯されたくないが、また、犯すべきでないところの、その人のアイデンティティーの大切な部分である。異なったパーソナルスペースの存在を認め合うことが、より良いコミュニケーションをすすめていくために重要になる。コミュニケーションが多様化している現代、言語教育に留まらずその背景となる文化や価値観をも合わせて学ぶ必要性を改めて痛感する。ウィリアム・ハウエルは「感性のコミュニケーション」という著書で第三の文化やコミュニケーションのジョイントベンチャーの必要性を訴えている。倫理的側面での摩擦を和らげるために、互いの倫理的行動規範を基に倫理的前提をうまく理解し合うことが望ましい。第三の文化とは互いの立場や思考スタイルを尊重しつつ共に生み出す真のコミュニケーションである。近年ではコミュニケーションは文化の壁を越えて計られているが、個々のアイデンティティーを保ちつつ個性を認め合いながら率直に表現できたら理想的であろう。

人は育つ環境の中で自分自身が納得いく文化をつくり、それに応じて自己表現していくのではないか。その仮説を追求するために二か国語以上を話す人のアンケートやインタビューを通して言語表現と心理的要因の関係を研究している。人はおかれた環境の影響によって何れかの文化に近い言語文化を維持するのだろうか。例えば、二か国語を話す人はその何れかの言語のもつ文化的背景を強く持つのであろう。それとも、二つの言語文化が複雑に混じりあって複雑な言語文化をつくるのか。二つの言語文化は完全に切り離して使い分けることは到底不可能であろう。その言語文化をつくりあげる心理的要因としてどのようなものがあげられるのか。もしそれぞれが複雑な要素が入り交じった言語文化からコミュニケーションを計る

のであればどのようにして相互理解をすすめていけば良いものか。複雑な異文化コミュニケーション論を追求していくことがこれからの課題である。

参考文献

- Barnland, Dean. 1975. *The Public and Private Self in Japan and the United States Comparative Styles of Two Cultures*. Yarmouth, Maine: Intercultural Press.
- Corsaro, William A. 1992. Interpretive Reproduction in Children's Peer Culture. *Social Psychology Quarterly*. Vol. 55: 2: 160-177.
- Doi, Takeo. 1973. *The Anatomy of Dependence*. Tokyo: Kodansha.
- . 1990. The Cultural Assumptions of Psychoanalysis. In Stigler, Shweder & Herdt(Ed.) *Cultural Psychology*. New York: University of Cambridge Press.
- Duits, Kjeld. 1992. *Foreign Language Education in Japan and the Netherlands: The Four Problems That Japanese Face*. Osaka: The 140th Regular Meeting of the Japan Netherlands Society of the Kansai.
- Ellis, R. 1986. *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Hall, Edward T. 1976. *Beyond Culture*. New York: Anchor Books.
- Hoare, Carol H. 1991. Psychosocial Identity Development and Cultural Others. *Journal of Counseling and Development*. Vol. 70. 10: 45-52.
- Hoffman, Eva. 1989. *Lost in Translation: A Life in a New Language*. New York: Penguin Books.
- Holtgraves, Thomas. 1992. The Linguistic Realization of Face Management: Implications for Language Production and Comprehension, Person Perception, and Cross-Cultural Communication. *Social Psychology Quarterly*. Vol. 55: 2: 141-159.
- ハウエル ウィリアム・久米昭元。「感性のコミュニケーション」大修館書店、1992年。
- Krashen, S. D. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Krashen, S. D., Terrell, T. D. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. San Francisco: The Alemany Press.
- Littlewood, W. 1984. *Foreign and Second Language Learning*. New York: Cambridge University Press.
- Myers, L. J., Speight, S. L., Highlen, P. S., Cox, C. I., Reynolds, A. L., Adams, E. M., Hanley, C. P. *Identity Development and Worldview: Toward an Optimal Conceptualization*. *Journal of Counseling and Development*. Vol. 70. 10: 54-62.
- 澤登春仁。「英語的思考」講談社現代新書、1990年。
- Shweder, Richard A. 1990. "Cultural Psychology—what is it?" In Stigler, Shweder & Herdt(Ed.) *Cultural Psychology*. New York: University of Cambridge Press.
- Slobin, Dan I. 1990. The Development from Child Speaker to Native Speaker. In Stigler, & Herdt (Ed.) *Cultural Psychology*. New York: University of Cambridge Press.
- Winters, M. and Tani, N. 1989. *Requests: A Comparative Study of Sociolinguistic Transfer*. Unpublished manuscript.